

## 緑のたからもの

鈴木 真央 長野県安曇野市 二十五歳

よたよた歩く小さな弟は「たからもの」と石や枝を拾ってはチャイルドシートの足元に置いていた。どうせ弟は足がつかないからいいけれど、歩きづらくてこっそり車から降ろしたりした。

小学生になった小さな弟は朝早く学校に向かい庭の大きな木に登っていた。あまりに毎日登るから通学路調査では家↓木↓学校と正直に書いた。

たまに真似をして木に登ろうとしたけれど弟みたいでできなくて私の足は一度も地面から離れなかった。

この頃弟は大きくなったら木にのぼる仕事をすると言っていた。そんな仕事ある訳ないよ。と草だらけになって帰ってくる弟を見て思った。高校生になった弟は朝早く学校に向かい造園の練習をしていた。

たまに真似をして石を並べてみただけで弟みたいに綺麗な石畳は出来なくて私の周りに石が散らかっただけだった。

この頃弟は造園の全国大会に行きたいと言っていた。そんな簡単に出られるの？と草だらけになって帰ってくる弟を見て思った。

高校三年生になった弟は本当に全国大会に出て高校生で一番になり、本当に木に登る仕事についた。

小さい弟はいつの間にか大きくなっていった。

小さい弟が愛した「たからもの」の緑を、今、大きくなった弟が守っている。

そうして守った緑は、きつとまたどこかの誰かの「たからもの」になっていく。

弟はあの時受け取った緑のバトンを今しっかりと握って走っているのだ。

そして今日も弟は草だらけで帰ってくる。